

## 共働き男女のワーク・ファミリー・コンフリクトに関する研究

— 乳幼児のいる家庭を対象に —

西村 もゆ子

### 問題と目的

#### 1. ワーク・ファミリー・コンフリクトと多重役割

##### (1) 仕事生活と家庭生活のワーク・ファミリー・コンフリクト—産業・組織心理学の視点

仕事生活での役割と家庭生活での役割との関係パターンの中でも、とくに対立・葛藤的な関係のあり方について米国を中心に様々な研究が行われている。この仕事生活と家庭生活の対立・葛藤的な関係は、ワーク・ファミリー・コンフリクト (Work-Family conflict; 以下WFC) と呼ばれ、ある個人の仕事と家庭領域における役割要請が、いくつかの観点で互いに両立しないような、役割間葛藤の一形態と定義されている (Greenhaus & Beutell, 1985)。これまでの研究から、WFCは総じて仕事満足感や家庭満足感にネガティブな影響をもたらし、ひいては抑うつ傾向の増加や生活満足感の低下をもたらすことが明らかにされている。我が国でも諸外国に比べて数は少ないが実証的な研究が行われており、ほぼ同様の結果が得られている。

一方で産業・組織心理学におけるWFC研究では、家庭生活の具体的な何が仕事との葛藤を引き起こす原因なのかの分かりにくいという指摘 (藤本・吉田, 1999) もある。つまり仕事生活に比べ、家庭生活、家庭役割というものの多様性について十分に考慮されているとは言い難いのである。

##### (2) 仕事生活と家庭生活における多重役割に関する研究

多重役割 (multiple roles) とは、ひとりの人が賃金を得る職業 (フルタイムだけでなくパートタイム, 内職, 家族従事者も含む) をもち、家庭には配偶者・子どもがいる状態を指す (小泉, 1998)。多重役割がもたらす心理的影響に関する仮説を働く母親の問題に適用した研究をレビューした小泉 (1997) は、仕事生活と家庭生活での多重役割が心理的にネガティブな影響を及ぼすと同時にポジティブな影響も及ぼすという複雑な心理的構造を生み出しているとまとめている。しかし働く母親の多重役割研究の進展に対して、働く父親の多重役割に関する研究はまだ少ない。またその進歩も遅れているために、多重役割での経験やその人がおかれている物理的人的状況を考慮した上での研究などについてはまだ十分に議論されていない (小泉, 1998) のが現状である。

### 2. 本研究の目的

仕事生活と家庭生活で多重な役割を持つことによって経験される心理的状态について、WFC研究と多重役割研究の2つの心理学的アプローチから迫ることができる。しかしそれぞれの研究では視点の違いが反映されていると思われ、2つの研究アプローチの視点を統合した上で未だ議論が十分でない課題、すなわち①女性だけでなく男性の仕事生活と家庭生活での多重役割による心理的影響についても検討を進めること、②仕事生活と家庭生活の間の何がコンフリクトを引き起こすのかということについて丁寧に検討していくこと、③夫婦という視点を考慮すること、などについて検討する必要があると思われる。

そこで本研究では次のことを目的とする。第1に、共働きの夫婦を対象にして女性だけでなく男性のWFCの規定要因についても検討することである。第2に、配偶者の協力がWFCにどのような影響をもたらすかについて検討する。具体的には、家事や育児がどう分担されているか、またそれがWFCにどう影響するかということについて着目する。

### 研究 I

#### 1. 目的

共働き夫婦の仕事生活と家庭生活の様子やWFCの有無、および男女の違いなどについて実態を把握し、仮説生成のための探索的な検討を行うことが研究 I の目的である。調査方法は半構造化面接調査とする。面接に際して、①普段どのような生活をおくり、現在の生活についてどう感じているか (WFCを感じているか)、②仕事生活と家庭生活のバランスをとるためにどのようなこと (WFCへの対処) が行われているか、③夫婦ともにお互いの生活をどう思っているか、について着目する。

#### 2. 方法

調査方法: 半構造化面接形式による夫婦同席面接を実施。所要時間は約1時間であった。

調査時期: 1999年10月~11月に行われた。

被面接者: 愛知県内に居住・勤務している共働きの夫婦を対象に、調査者の知人を通じて調査への参加を7組に依頼した。うち夫婦ともに協力を得られたのは3組であった。

### 3. 結果と考察

3組の共働き夫婦に面接調査を行い、探索的な検討を行った。その結果、①男女ではWFCの感じ方に違いがみられること、②またそれには仕事や家庭での役割に対する考え方や性役割観が関連していると思われること、③子どもの有無によってWFCの感じ方や内容に違いがあること、④またそれには育児や家事を支援してくれるサポートの有無が大きな影響を持つこと、⑤夫婦が互いに協力的であるという良好な関係性がWFCを緩和する影響を持つのではないかとということ、⑥共働き夫婦のWFCには自己に対する不一致感だけでなく、配偶者に対する不一致感が関連を持つのではないかとということ、などが示唆された。

しかし3組のみの面接データの分析であったことや、面接法という調査方式を採用し、夫婦同席で面接を行ったことなど、サンプルの偏りやデータの信頼性および面接者による解釈の恣意性などの客観性に問題が残るものでもあった。そこで研究Ⅱでは質問紙調査を行い、研究Ⅰにおいて示唆された結果を実証的に検討していくこととする。

#### 研究Ⅱ

##### 1. 目的

研究Ⅱでは、配偶者との関係についても考慮しながら、夫婦それぞれのWFC意識に影響を与えられるいくつかの要因についてその影響を実証的に検討することを目的とする。具体的には個人内要因として、①仕事観、②子ども観、③性役割態度、を取り上げ、対配偶者との家庭生活の様相として、①家事分担、②育児分担、を取り上げてWFCとの関連を調べる。また共働きの家庭といっても家族メンバーの年齢や構成によって、その生活の様相は変化する。そこで研究Ⅱでは、WFCが最も高まる時期にあると思われる、乳幼児を持つ共働きの夫婦を対象に調査を行う。

##### 2. 方法

手続き：愛知県内の保育園（2園）、及び東京都内の保育園（5園）に通う園児を持つ父母に園を通じて調査用紙を配布した。

被調査者：夫婦ともに同居の世帯を対象に配布された530通のうち、370通が回収された（回収率69.8%、内訳：男性166名、女性204名）。

質問紙の内容：家事・育児分担度、平等主義的性役割態度尺度（鈴木, 1991）、子ども観・仕事観尺度（福丸・無藤・飯長, 1999）、WFC尺度（金井, 2000）、抑うつ傾向（Zung自己評価式抑うつ尺度）など。

##### 3. 結果と考察

##### (1) WFCの構造

WFC尺度について因子分析（主成分分解, Varimax回転）を行ったところ、男女ともに3因子が抽出された。この結果よりWFCの下位構造として、①時間葛藤、②仕事→家庭葛藤、③家庭→仕事葛藤、の3つが男女ともに見られることが明らかになった。

##### (2) 仕事観・子ども観とWFC

男性について、①仕事に対する否定的な意識が高いと、時間葛藤と仕事→家庭葛藤も高いこと、②仕事に対する肯定的な意識とWFCには関連が見られないこと、③子どもや子育てに対する否定的な意識が高いと、時間葛藤と家庭→仕事葛藤も高いこと、④子どもや子育てに対する肯定的な意識が高いと、家庭→仕事葛藤は低いこと、が示唆された。女性は、①子育てや仕事に対する否定的な意識が高いと時間葛藤は高いこと、②一方で子どもや子育てに対する肯定的な意識が高いと時間葛藤も高いこと、③家庭よりも仕事を優先にしたいという仕事に対する肯定的な意識が高いと仕事→家庭葛藤は高いこと、④子どもや子育てに対する否定的な意識が高いと、家庭→仕事葛藤は高いこと、が示唆された。

以上より、「家庭に関わりたくても仕事があるためにできない」という男性の仕事→家庭葛藤と、「仕事にもっと関わりたいと思いながらも家庭でしなくてはならないことが多く、仕事を優先にすると必然的に家庭のことが犠牲になってしまう」という女性の仕事→家庭葛藤、というように、葛藤が生じる背景について男女間での質的な違いが推察された。

##### (3) 家事・育児分担・性役割態度とWFC

男性について、①平等主義的性役割態度が低く（どちらかといえば伝統主義的性役割態度を持つ）、家事参加度が高いと、時間葛藤と家庭→仕事葛藤が最も高まる傾向にあること、②家事や育児への参加度が高いと仕事→家庭葛藤は低い傾向にあること、が明らかになった。男性にとって家事や育児に参加することがあまりに多いと仕事との葛藤を高めてしまうが、適度に育児に参加することができれば葛藤は低く調整されるものと考えられる。

女性では、①夫の家事参加が高いと時間葛藤が低いという傾向にあること、②平等主義的性役割態度が低く、夫の家事参加も低い場合に、最も仕事→家庭葛藤が高まること、が明らかになり、育児をしながら働く女性のWFCに対して、夫の協力が得られるか否かということが重要な意味を持つことが示唆された。

以上より、男性が育児に参加することの意義や、夫婦で家庭役割を協力的に行うことの意義が、共働き男女のWFCとの関連から検討することであらためて確認された。

### 総合考察

男女の結果を合わせて考えてみると、労働時間の長い夫→夫の家事や育児への関与困難（夫のWFC増加）→妻の家事や育児負担の増加（妻のWFC増加）、といった関係が想定され、共働き夫婦のWFCをもたらず循環的な構造となっているものとも考えられる。今後はどうすればWFCを軽減することができるかといった課題について、家族を一つのシステムとして検討していく必要があると思われる。

ここで働く父親、母親のすべてが仕事役割と家庭役割との間で精神的にも肉体的にも辛い状況にあるのではない。仕事や子育てというものを、自分を成長させ、人間として成熟させてくれるものであるといった捉え方ができる父親や母親は、WFCをそれほど強く感じることもなく、抑うつにも至らないものと思われた。しかし子育てに対してポジティブな気持ちで向かうことのできる父

親や母親というのは、親となることの意義を十分に味わえるような環境や支援を身近に持つ恵まれた人たちなのかもしれない。今回の研究では家事や育児を支援してくれる近親者や、会社の制度の有効性などのソーシャル・サポートについて考慮せず個人や夫婦内の要因に着目して検討をすすめた。しかし逆に、こうしたソーシャル・サポートの問題が大きく影響を持つものであることを強調するような結果となったともいえる。

またWFCというのは、仕事と育児を両立させたい人々には不親切な社会であることから生じているものと考えられることもできる。WFC、もしくはワーク・ファミリー・バランスといった視点で今後も研究を進めていくことが、育児に奮闘しながら仕事をしている母親や父親に対して、心理学的なアプローチから支援していくことに繋がっていくものと思われる。